

ノートテイキングに関する 学生の意識調査

神戸学院大学 森下美和 miwa@gc.kobegakuin.ac.jp

2018年3月3・4日

@日本英語教育学会・日本教育言語学会第48回年次研究集会

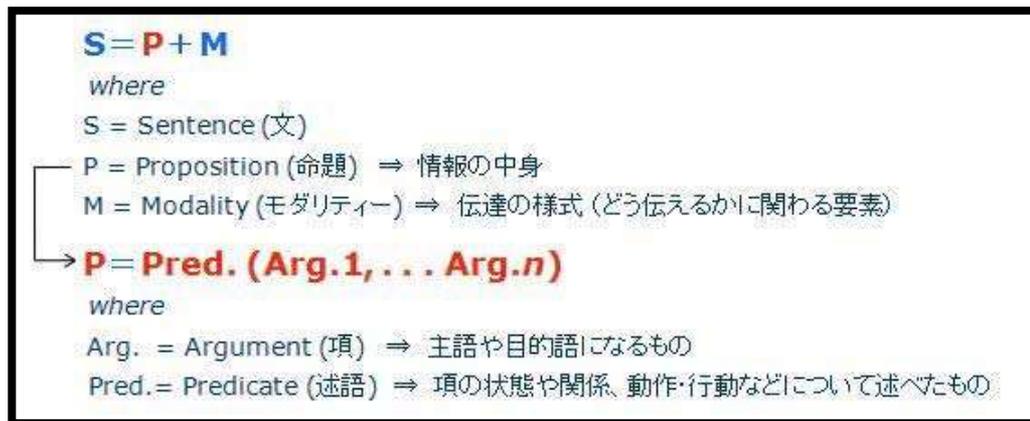


はじめに

- 逐次通訳におけるノートは、通訳者の短期記憶容量の限界を補うための重要な手段であり、ノートテイキングは通訳者にとって必ず習得しなければならないスキルのひとつである。
- 現在の大学などにおける通訳訓練の中では、ノートテイキングは体系的に指導されておらず、「できるだけたくさん練習して、自分なりのやり方を身につける」といったごく大雑把なアドバイスのほかには、その指導についてコンセンサスが成立していない（染谷，1994-2015）。
- 本研究では、主に逐次通訳を扱うビジネス通訳クラスで、学生の通訳用ノートの実態と変化を調査するにあたり、自身のノートテイキングに関する意識調査を行った。

ノートテイキングに関する研究

- ✓ Rozan (1958) : ノートテイキングの技術面における主要なポイントをほぼカバーしている。
- ✓ Matyssek (1989) : 数百におよぶ通訳ノート用の記号を提案。ヨーロッパの通訳者の間では広く知られており，日本でも部分的に取り入れられている。
- ✓ Fillmore (1968) : 言語モデルの提案 (染谷, 1994-2015からの引用)



命題モデル (FILLMORE, 1968)

- ノートは、断片的情報の集合ではなく、その背後に一定の論理構造を持っており、発話の復元を可能にするものでなくてはならない（染谷，1994-2015）
- ✓ 聞いた内容を記録するにはノートを取らなくてはならないが、正しく聞き取れていたとしてもノートの取り方によっては再現に至らない可能性もある。
- ✓ 命題の核となる項と述語が一定の論理構造を持って紙面上に配置されたものが「よいノート」であるという前提に立ち、学生の意識調査におけるコメントから、その達成度を観察する。

調査

■協力者

- ✓発表者の担当するビジネス通訳クラスを受講した大学3年生20名
- ✓Versant English Test で平均46.2点

■授業内容

- ✓英日を中心とした通訳トレーニング（逐次通訳）。音声を聞きながらノートを取り，1パラグラフ程度ごとに通訳するという流れで，個人，ペア，グループ単位での活動を行った。
- ✓ノートテイキングについては，1) 主語と述語（動詞）からなる命題のメモを優先させること，2) 情報密度の高い漢字の有効活用についての指導や，3) 省略記号の紹介などを行った。

調査

■方法

- ✓初回授業と最終授業で、同じテキスト(井, 2000)の音声を聞かせ、ノートテイキングと逐次通訳をさせた。
- ✓メモ(A4コピー用紙)および録音音声はそれぞれ回収した。
- ✓最終授業で、ノートテイキングに関する意識調査を実施した。

結果

■改善点（抜粋）

- ✓日本語をうまく使ってメモを取ることができた
 - ✓大きな誤訳がなくなった
 - ✓うまくメモがとれなかった箇所をうまくカバーできた
 - ✓スピーチのパターンが分かってきたので、次の内容を予測して通訳することができた
- ノートテイキングの技術そのものが上がったか、ビジネススピーチに慣れたことによりパフォーマンスが改善した可能性。

結果

■改善すべき点（抜粋）

- ✓話の流れは大筋掴めたが、文と文のつながりがあいまいにしか理解できないメモになっていた
- ✓書き取り作業と実際聞き取った内容の理解を同時にすることがいまだに難しい
- ✓理解できなかった内容を省略したり、自分の知識で補ったりする技術がまだ未熟だ
- 重要なポイントを落とさずにメモを取ったり、記号を十分活用できるまでには至っていない。

まとめ

- トレーニングを通じて、単語の羅列だけでは意味がないことに気づいた、これまでは不要なメモを取ることで重要な点を聞き逃していた、などの気づきがあった。
- その気づきを活かして実際の通訳に役立つメモを取れるところまではまだ至っていないと感じている学生も多かった。
- 通訳の現場では他人のメモを見る機会はあまりないが、授業の中では、学生同士でノートをシェアしたり、お互いのノートを解読する練習なども効果的であると考えられる。
- 練習量を増やしてノートがどのように改善していくかを追跡し、ノートとパフォーマンスの関係について、実際にいくつかの事例を分析する必要がある。また、そこから得られた知見をもとに、ノートテイキングの現実的なモデルを提案したい。

■ 謝辞

本発表にあたっては，関西大学の染谷泰正教授から大変有益なアドバイスをいただきました。この場をお借りして，深く感謝の意を表します。

■ 付記

本発表は，森下美和 (2017) でまとめた研究の内容を一部紹介したものである。

参考文献

- Fillmore, C.J. (1968). The case for case. In Bach and Harms (Ed.): *Universals in Linguistic Theory*. New York: Holt, Rinehart, and Winston, 1-88.
- Matyssek, H. (1989). *Handbuch der Notizentechnik für Dolmetscher. Ein Weg zur sprachunabhängigen Notation*. Heidelberg: Julius Groos.
- Rozan, J-F. (1958, transl. 2002). Notetaking in Consecutive Interpreting. In Gillies, A. and Gillies, A. (eds.) *Language and Communication 3*. Poland: Tertium.
- Someya, Y. (2017)(ed). *Consecutive Notetaking and Interpreter Training*. London and New York: Routledge.
- 井洋二郎 (2000) 「英語ビジネススピーチ実例集」 ジャパンタイムズ
- 染谷泰正 (1994-2015) 「英語通訳訓練法入門」 (オンライン版) 関西大学外国語学部通訳翻訳プログラム用教材 (※プログラムの詳細は染谷2015参照)
- 染谷泰正 (2015) 「大学における通訳教育のための e ラーニング教材の開発とその学習効果に関する実証研究」平成26年度科学研究費助成事業研究実績報告書 (課題番号: 243220112, 研究代表者: 染谷泰正・関西大学)
- 森下美和 (2017) 「ビジネス通訳クラスにおけるノートテイキング」ことばの科学研究第18号, 101-108.

THANK YOU!

